

新潟県三島郡寺泊町

土手上遺跡

発掘調査報告書



1999

寺泊町教育委員会

序

桐原地区県営ほ場整備事業の実施に伴い、平成5年春の埋蔵文化財の分布調査から始まった発掘調査も平成10年度まで5回の調査を経て、この度の「土手上遺跡発掘調査」も無事に終了することができました。ここに、その報告書が刊行されることにあたり、関係諸氏の御尽力に深く敬意を表します。

今回調査が行われた水田地帯は、当町のまさに穀倉地帯にあたる場所です。分布調査、確認調査、本発掘調査と進むなかで、古代先人たちが生活や生産の場としてこの地を選んだとする証も明らかになったのではと思います。

寺泊町には西山丘陵を始めとする丘陵地帯及び島崎川流域は、先人の築いた遺跡が数多く点在しています。平成6年度の割田遺跡発掘調査では、河川跡2本、溝跡3本、および河川の縁辺補強のためかとみられる枕群等の遺構が検出されています。隣の和島村の八幡林遺跡、門新遺跡及び下ノ西遺跡においても、歴史的に重要な遺物の発見が報告されています。

近年、社会の急速な変化によって我々の生活環境も大きく変化し、それに伴う開発事業も多く計画されています。このことは、先人による文化遺産の破壊の危機であることの裏返しと言っても過言ではありません。本来、こうした遺跡は、我々郷土の大切な歴史的遺産とし、現状のまま保存し後世に伝えていくことが、現代に生きる私どもの責務であると考えます。しかし、開発のためやむをえず遺跡に手を加えなければならない場合は、十分な事前調査を実施し、記録保存の形をとらざるを得ない場合も生じます。

今回の調査も、ほ場整備事業という、まさに日本の主食である米が、ウルグアイ・ランドの農産物分野で、国際化に対応して行くために、避けて通れない事業として実施した発掘調査であり、その範囲も必要最小限のものであります。この調査により、古く千数百年前の人間の生活、さらには当時の社会的環境を偲ばせるものが発見されています。ここで稲作など行うには、並々ならぬ苦勞があったのではないかと往時に思いを馳せております。

まさに古代史のロマンを限りなく広げてくれる、町民にとっても夢多い価値ある調査でありました。詳細は、本報告書に譲ることといたしますが、今回の発掘調査が無事に終了できたことには、事業主体であります長岡農地事務所の御協力、終始御指導御助言を賜った県教育庁文化行政課、並びに御尽力を賜った寺村光晴和洋女子大学名誉教授をはじめ、駒見和夫同大学助教授、見留武士同大学研究員、及び連日発掘調査に従事された調査作業員、関係各位に対し敬意と感謝の意を表する次第であります。

平成11年3月

寺泊町教育委員会 教育長 長谷川 達栄

例 言

1. 本書は、泉宮ほ場整備事業計画にともなう、土手上遺跡の報告書である。土手上遺跡は、新潟県三島郡寺泊町大字下桐字土手上2424番地1他に所在する。
2. 調査にあたり、長岡農地事務所と事前の協議を実施した。発掘調査の範囲は、水路となる部分（135㎡）である。
3. 調査は、平成10年10月26日から同年11月1日までの間、寺泊町教育委員会（教育長 長谷川達栄）が実施した。調査組織は本頁下段に記してある。
4. 出土遺物の整理及び報告書の作成は、平成10年12月から平成11年3月にかけて実施した。整理作業は見留武士がおこない、渋谷奈津坤の助力を得た。
5. 本書は、寺村光晴の監修で、駒見和夫、見留武士、田中章が分担執筆したものを駒見和夫が編集した。執筆者名は、各文末に記してある。
6. 出土遺物は、寺泊町教育委員会が保管している。
7. 発掘調査から本書の作成に至るまで、各方面から多大な指導と協力を頂いた。ここに芳名を記し、衷心より厚く御礼申し上げます。

文化庁、新潟県教育委員会文化行政課、(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団、石川日出志、伊藤秀和、
沢田 敦、関 雅之、千代 肇、戸根与八郎、藤巻正信、本間信昭、村木 弘、(有)菅沼組、
寺泊観光センター 一氏名は五十音順一

— 調 査 組 織 —

調査主体	寺泊町教育委員会（教育長 長谷川達栄）
調査担当者	寺村光晴（和洋女子大学名誉教授）
主任調査員	駒見和夫（和洋女子大学助教授）
調査員	見留武士（和洋学園埋蔵文化財調査室調査研究員）
調査補助員	金子貞次郎、金子繁夫、土田三四次、中島千代治、 早川一郎、早川三子男、峠島一郎（以上地元有志）
調査協力	長岡農地事務所、寺泊町農林水産課、三島北部土地改良区 金子徳光、桑原仁志、中島録郎、佐藤貞一、中島トキ（以上地主）
事務局	田中正明、星 博、田中 章（以上寺泊町教育委員会）

目 次

序	寺泊町教育長 長谷川達栄
例 言	
I 遺跡の立地と環境	1
II 発掘調査の経過	2
(1) 発掘調査に至るまで	2
(2) 調査の経過	2
III 調査の概要	3
IV 出土の遺物	5
(1) 古墳時代の土師器	5
(2) その他の土器	7
V まとめ	7

挿 図 目 次

第1図	周辺の地形と主要遺跡の分布	1
第2図	発掘トレンチの位置	3
第3図	発掘トレンチ全測	3
第4図	トレンチ内A・H・Oグリッド土層断面	3
第5図	出土遺物の分布	4
第6図	古墳時代の土師器	6
第7図	その他の土器	7

写 真 目 次

表紙写真	土手上遺跡出土の土師器	
写真1	土手上遺跡全景	ii
写真2	発掘トレンチ	4
写真3	土層断面	5
写真4	遺物分布状況	5
写真5	土師器発出土状態	5
写真6	出土土器	8



写真1
土手上遺跡全景
(南より)

I 遺跡の立地と環境

土手上遺跡は、新潟県三島郡寺泊町大字下桐字土手上に所在する（第1図、写真1）。

新潟県のほぼ中央部、中越地方の海岸寄りにあたるこの地には、海岸線に平行して東側西山丘陵と西側西山丘陵が並走している。これらの丘陵には主尾根と直行して支尾根が伸び、その間に樹枝状に入り込んだ低平な支谷がみられる。支谷には谷戸田があり、小支谷の丘陵裾に沿って現在の集落が展開する。そして、東側西山丘陵と西側西山丘陵の間には島崎川が北流し、細長い谷底平野を形成している。土手上遺跡はこの島崎川右岸の平野の東縁、東側西山丘陵の西側裾から低地付近に位置する。標高は約9m～10mである。

東側西山丘陵には、小支谷に面する緩斜面や、平野に面する緩斜面およびその裾部に遺跡が点在している。土手上遺跡の周辺では、南へ約300mに縄文時代晩期と平安時代の山王遺跡、南西約700mに平安時代の小谷地割遺跡、東へ約900mに縄文時代前期～晩期と奈良・平安時代の松葉遺跡、南西約1.2kmに縄文時代中期～後期と古墳時代～平安時代の五分一稲場遺跡などがある。

寺泊町には縄文時代や奈良・平安時代の遺跡は多いが、本遺跡との関連で注目したい古墳時代の遺跡は、島崎川流域に視野を広げても少ない。集落とみられるものには五分一稲場遺跡の他に、古屋敷遺跡や和島村上桐の門新遺跡、同島崎の山田郷内遺跡があるものの、住居跡の検出はなく、その内容はほとんど不明である。古屋敷遺跡は沖積微高地上の遺跡で、昭和29年の耕地整理の際に、弥生時代末期から古墳時代初頭の土器が出上しているが、遺構については知られていない。五分一稲場遺跡は丘陵端部の斜面上に立地し、溝や小穴などが発掘されている。出土土器は甕や高坏が多く、古式の須恵器もみつかっており、その時期は前



第1図 周辺の地形と主要遺跡の分布

期～中期にわたり、とくに中期が中心である。山田郷内遺跡は丘陵裾部に立地する遺跡で、前期から後期にかけての土器は出土しているが、遺構は検出されていない。また、門新遺跡は低地にあり、田川遺において前期～後期の土器が出土している。後期の土師器には6世紀代の長胴甕・甔・埴・高坏などが存在する。

古墳についても発見数は少ない。町軽井の大久保古墳群や和島村小島谷の下小島谷古墳群など、前期の前方後方墳や方墳は若干みつかっている。大久保古墳群は舌状に突出した丘陵尾根上の小平坦部に立地しており、前方後方墳2基と方墳3基が存在する。下小島谷古墳群も大久保古墳群と同様の立地条件で、前方後方墳2基と方墳1基で構成されている。両古墳群にみられる前方後方墳は、全長約12m～25mと小形で、前半ごろの築造とみられる。一方、中・後期の古墳には確実なものがなく、様相はまったく分かっていない。こうした点から、土手上遺跡の発掘調査は本地域の古墳時代解明のための貴重な資料となろう。

(駒見和夫)

II 発掘調査の経過

(1) 発掘調査に至るまで

寺泊町の桐原地内は、町の穀倉地帯の一つとして長年にわたり稲作が営まれてきた。この広大で恵まれた肥沃な地域には、遺跡の存在がほとんど確認されていなかった。

平成3年ごろから県営ほ場整備事業の計画に伴い、数回にわたり長岡農地事務所、寺泊町農林水産課、及び新潟県文化行政課と協議をおこない、平成5年3月2日～5日に開発区域内の遺跡分布調査を、県文化行政課と新潟大学の学生の協力を得て実施した。

その結果、周知の遺跡である「古屋敷遺跡」の他、表面採集により17ヶ所において土師器等の遺物が発見され、遺跡の存在の有無を確認する必要が生じてきた。

分布調査の結果に基づき、平成5年12月13日～17日の5日間と平成6年1月28日に、県文化行政課の御指導・御協力の下で、平成6年度に工事に入る3ヶ所の埋蔵文化財の確認調査をおこなった。

この調査により古い河川と思われる遺構と遺物が検出され、これにより平成6年2月、「割田遺跡」として文化財保護法に基づく遺跡の周知化をおこない、寺村光晴和洋女子大学名誉教授を団長をお願いして、平成6年10月に本調査を実施した。その後、平成6年12月、平成8年3月・12月に県文化行政課の御指導を得、また平成8年12月には越路町の専門職員から協力をいただいた。さらに、平成9年9月29日～10月3日の県文化行政課の御指導による確認調査の結果、土手上遺跡において排水路となる部分から土器が出土し、本調査が必要であることとなった。

これらの経過を踏まえ、平成10年4月～9月に長岡農地事務所と埋蔵文化財の保存について協議を重ね、水路部分約135mについて発掘調査を実施する計画が立てられた。そこで、寺村光晴和洋女子大学名誉教授に調査をお願いし、同大学駒見和夫助教授、同大学見留武士研究員から、平成10年10月26日～11月1日の間に本調査をしていただいた。

(田中 章)

(2) 調査の経過

発掘調査は、平成10年10月26日から11月1日までの7日間にわたって実施した。以下に経過を記す。

10月26日 打ち合わせのち、発掘調査区内にグリッドを設置。また、水準点を移動する。

10月27日 Aグリッドより発掘を開始。Iグリッドまで終了する。堆積土層の断面図も作成する。

10月28日 K～Mグリッドから遺物が出土し、その分布範囲の把握につとめる。

10月29日 出土した遺物の位置を作図しながら取り上げたのち、遺跡の完掘写真を撮影する。同時に、堆積土層の断面図を作成する。

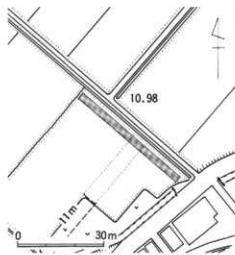
10月30日 重機により調査区の埋め戻しをおこなう。周囲の環境整備ののち、発掘用具などを搬出する。

10月31日・11月1日 教育委員会において、出土遺物や図面を整理。報告書作成にあたっての打ち合わせをおこない、発掘を終了する。
(見留武士)

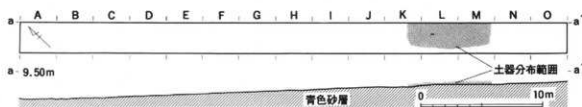
III 調査の概要

土手上遺跡は東麓西山丘陵の裾端から低地部分に位置し、標高は9m～10mを測る。丘陵裾付近の一部は畑であるが、遺跡の大部分は水田となっている。今回の発掘調査は、ここに新設される幅0.6mの農業排水路計画区のうち、長さ45mの範囲が対象である。

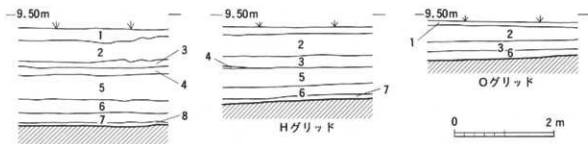
調査方法は、排水路の設置部分にトレンチを設定して発掘をおこなった(第2図)。トレンチは排水路設置にともなう掘削部分を勘案して、幅2.5m、長さ45mとした(第3図、写真2)。調査面積は112.5m²である。トレンチは3mずつに区分し15のグ



第2図 発掘トレンチの位置
(スクリーントーンが発掘トレンチ)



第3図 発掘トレンチ全測



1. 暗褐色土層 耕作土 2. 明褐色粘質土層 3. 褐色粘質土層 4. 黒褐色粘質土層 流木を含む
5. 青灰色粘質土層 流木を含む 6. 黒色粘質土層 流木や木葉などを含む 7. 暗褐色粘質土層
8. 黒褐色砂質土層 斜線は青色砂層

第4図 トレンチ内 A・H・Oグリッド土層断面

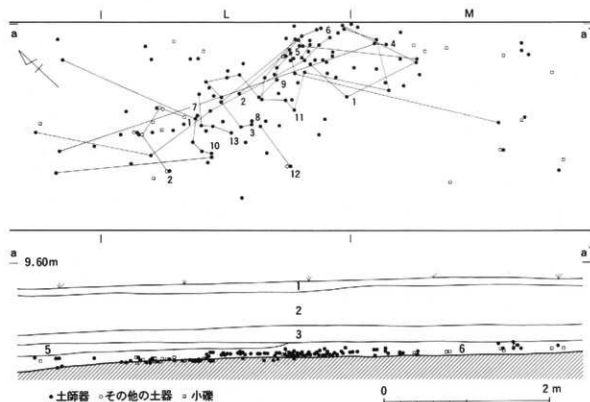


写真2 発掘トレンチ
(南東より)

リッドを設定し、北西端から南東端に向かってA～Oのアルファベットを順に付し、グリッド名とした。発掘は覆土の上層を重機により除去し、下層は人力によって掘り下げた。下層部分からは地下水がしみ出したため、排水しながらの作業となった。

トレンチ内の覆土は、北西端のAグリッドにおいては水田面から1.9mで青色砂層に達し、中間のHグリッドではその深さは1.3m、丘陵裾部に近いOグリッドでは0.6mと徐々に浅くなっていた。青色砂層までの堆積土層はいずれも粘性が強い。堆積土（第4図、写真3）はAグリッドで8層存在するが、このうち第8層の黒褐色砂質土はDグリッドでみられなくなり、第4層の黒褐色粘質土はFグリッドで、第7層の暗褐色粘質土はHグリッドで、第5層の青灰色粘質土はLグリッドでそれぞれ消滅する。そして、Oグリッドでは堆積土が4層と少なくなっている。また、第4・5・6層からは流木と木葉が検出された。流木は20cm～50cmの長さでA～Iグリッドに多く、J～Oグリッドにかけては徐々に少なくなっていた。木葉はJ～Oグリッドの第6層中に多く、小石とともにあった。

このような堆積土と流木や木葉の検出状況からみると、現在水田となっているこの地が、かつては島崎川による氾濫原ないしは島崎川に続く湖沼のような状態であったことがわかる。遺跡の名称としたこの地の小字名である「土手上」は、島崎川の氾濫などの水害に対処するため、近世に構築された千間土手の上手の位置を示している。千間土手は柳場土手とともに、島崎川東岸側の木島・谿田・下洞・鯉口4か村の土地家屋



第5図 出土遺物の分布
(遺物の番号は挿図番号に対応する。また、接合関係を有する遺物は直線で結んである。)

を守るものである。千間土手の存在はその構築以前に、遺跡付近がたびたび冠水していたことを示している。そして、丘陵裾端部である発掘トレンチの南西側では、砂層までの堆積土層が少なく且つ浅くなっていることから、J-Oグリッド付近が水辺であったと考えられる。

発掘の結果、遺構は検出されなかった。しかし、K・L・Mグリッドにおいて土器片が集中して検出された(第5図、写真4・5)。それ以外の地点からはまったく検出されなかった。出土した土器はいずれも黒色粘質土の第6層からで、小片を合わせて300点近くがあった。土器の分布範囲は、南北が約7mと狭く、東西はトレンチ外にさらに広がるため不明である。出土した土器の大部分は古墳時代の土師器で、それ以外に土師器以外の甕片が2点あった。土師器は坏・甕・瓶があり、その破片数は坏19パーセント、甕78パーセント、瓶3パーセントの割合となっている。

以上の土器は、水辺とみられる場所において、しかもそれほど広くはないと推定される範囲で集中的に分布していることから、短期間に廃棄された可能性が高い。廃棄は土師器の時期におこなわれ、若干の他の土器もその時一緒に混入したものではないかと思われる。

(駒見和夫)

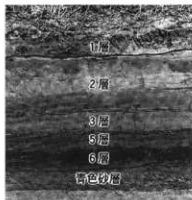


写真3 土層断面 (Iグリッド)

Ⅳ 出土の遺物

(1) 古墳時代の土師器 (第6図、写真6)

破片約300点、重さにして約8kgが出土した。須恵器はともなわず、土師器の内訳は坏6個体、瓶1個体と約15個体の甕である。

1-6は、坏である。6点とも底部は丸底で、口縁部外面から内面にかけて黒色処理されている。これらは口縁部が外反して体部外面にへら削り整形するA類(1・2・4・5)と、口縁部がわずかに外反して体部外面にハケ目痕跡を残すB類(3・6)に大別される。

1は丸底底部から内弯して体部が立ち上がる。口径は16.4cm、器高は6.7cmである。色調はにぶい黄褐色を呈する。

2は丸底底部から直立ぎみに体部が立ち上がる。口径は15.4cm、器高は6.4cmである。色調はにぶい黄褐色を呈する。

3は丸底底部から内弯して体部が立ち上がる。口径は13.4cm、器高は5.2cmと推定される。色調は明赤褐色を呈する。

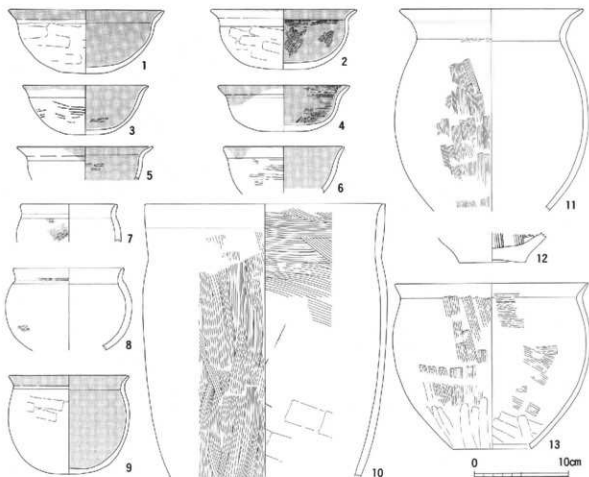
4は平底ぎみの丸底底部から内弯ぎみに体部が立ち上がる。体部外面のへら削りは、磨耗が著し



写真4 遺物分布状況



写真5 土師器甕 (第7図-10) 出土状態



第6図 古墳時代の土師器

く確認できない。口径は13.8cm、器高は4.9cmと推定される。色調はにぶい黄褐色である。

5は丸底底部から直立ぎみに体部が立ち上がる。口径は14.2cmと推定される。色調はにぶい黄褐色を呈する。

6は丸底底部から内弯して体部が立ち上がる。推定口径は12.6cm。色調はにぶい橙色を呈する。

7～9は、小型甕である。7・8は、張りの弱い胴部から頭部を経て、口縁部でやや外傾する。頸部のくびれは弱い。どちらも胴部から体部にハケ目痕跡が認められる。7の口径は10.0cm、色調はにぶい黄褐色を呈する。8は口径11.4cm、色調は黒褐色である。

9は丸底の底部から丸みをもって胴部が立ち上がり、頸部は「く」字状を呈する。口縁部は外傾する。胴部外面はへら削りされ、口縁部の外面から内面にかけて黒色処理が施される。口径は12.6cm、器高は10.4cmである。色調はにぶい黄褐色を呈する。

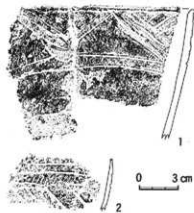
10～12は大型の甕である。10は張りの弱い胴部から頭部でわずかにくびれ、口縁部は直立ぎみにやや外傾する。外面肩部から胴部は縦位のハケ調整で、内面口縁部から胴部には横位のハケ調整を施す。内面胴部はへらナデされる。口径は25.2cmと推定され、色調はにぶい黄褐色を呈する。

11は張りのある胴部から「く」字状の頭部を経て、口縁部で外反する。外面肩部から胴部には、縦位のハケ調整を施す。口径19.2cm、胴部径20.6cm。色調はにぶい黄褐色を呈する。

12は平底の底部である。器厚が厚く、内面にハケ目痕跡を残す。底径は7.0cm。色調は橙色を呈する。

13は単孔式の甗である。胴部に最大径をもつ。頸部は「く」字状を呈し、口縁部で外傾して細くすばまる。外面の肩部から胴部には斜位及び縦位にハケ調整され、内面の頸部から胴部には横位及び斜位のハケ調整を施す。内外面とも胴部下端はヘラ削りされる。口径は20.4cm、胴部径は21.0cm、底径は8.2cm、器高は17.5cmである。色調は明黄褐色を呈する。

以上、本遺跡出土の土師器は、黒色処理された坏類と、小型の甗に特徴が認められる。黒色土器が主体をなす例としては、刈羽郡西山町の高塩B遺跡や、柏崎市の刈羽大平遺跡に類例が求められ、6世紀中葉～後葉に比定されている。本遺跡ではこれらの内面黒色坏類とともに小型甗が出土しているので、新しい段階に含まれるものと考えられる。ゆえに、出土土師器の一群は、6世紀後半ごろに位置付けられるものと思われる。(見留武士)



第7図 その他の土器

(2) その他の土器 (第7図, 写真6)

わずか2点しか出土していない。いずれも甗形の破片である。

1は口縁部から胴部の破片である。器面は無文で、平行の刻線によって区画された口縁部に重複する山形の刻線文が施される。口唇部は、ヘラ状工具による折り返し状の押し当てが認められる。

2は胴部片と考えられる。横位及び斜位の単節縄文を地文として、平行の沈線を施す。

双方とも褐灰色を呈し、胎土には若干の砂礫を含む。

上記2点は、内湾する器形と平行線文・山形文を施す点で、北蒲原郡聖籠町の二本松遺跡との類似が認められる。この点から、弥生中期前葉～中葉ごろのものと考えたい。しかし、一方では縄文土器の山形沈線文とも類似している。しばらくは特定をひかえ、今後の検討を待ちたい*

*この土器については、千代・岡 雅之・本間信昭・石川日出志の諸先生方にご教示を頂きました。(見留武士)

V まとめ

今回の土手上遺跡の調査は、トレンチによる小規模な発掘で遺構は検出されなかった。しかし、短期間のうちに廃棄されたとみられる古墳時代後期の土師器群がまとまって出土した。島崎川流域ではこれまで該期の遺跡がほとんど知られていなかったため、その解明の糸口となるものであろう。新潟県内をみても、古墳時代後期、なかでも6世紀代の集落遺跡の調査例は希で、とくにタイムスケールとなる土器の様相は不明部分が多い。6世紀代の土器がある程度まとまって出土した遺跡は、高塩B遺跡(刈羽郡西山町)や一之口遺跡(東地区(上越市))など少ない。土手上遺跡で出土した一群は、坏は丸底ですべて黒色処理が施されており、大型の甗は長胴化の傾向が認められ、さらに球形の胴部を呈する小型甗の特徴などから、6世紀後半ごろとすることができよう。これらは、個体数が少なく器種組成は高坏や鉢などを欠いているが、一括資料として土器編年上のメルクマールになるものと思われる。

土器群が出土した地点は、丘陵裾端部の水辺とみられるところである。完全に復元できる土器がないことから、破損して不用になった土器を捨てた可能性が高い。出土量は少なく、出土範囲もあまり広くはない。

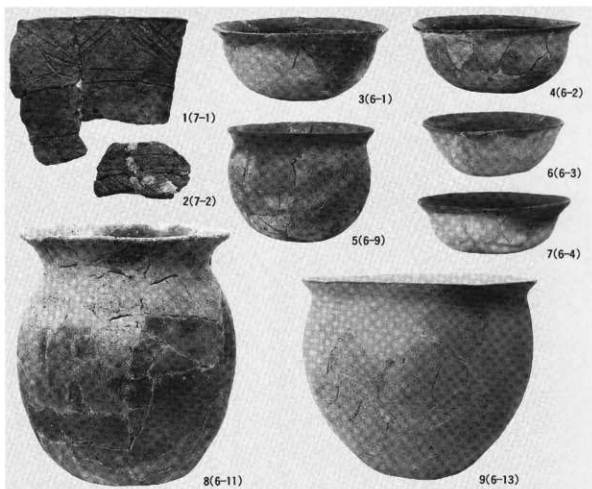


写真6 出土土器【1～7：S=1/2、8・9：S=1/4、()内の数字は検出番号と遺物番号を示す】

したがって、出土地点は継続的な土器の捨て場ではなく、一時的な廃棄場であったとみられる。そして、これらの土器群を使用していた人々の集落は、この廃棄地点からそれほど離れていないと思われる。本遺跡から南西約1.2kmにある五分一稲場遺跡では、丘陵端部の緩斜面において、古墳時代前・中期の溝跡や小穴などの生活の痕跡が検出されている。この点から、本遺跡でも土器群の出土地点に続く背後の丘陵部の近くに、古墳時代後期の集落の存在した可能性が指摘できる。

また、共伴した2点の甕の破片も、本遺跡の近辺に当該期の集落などがあったことを予測させるものである。ただ、出土した2点はその特徴から弥生時代中期前葉～中葉ごろと思われるものの、明確な判断はできなかった。文様や器形は、縄縄土器にも一部が共通する。近年では、内越遺跡（刈羽郡西山町）や南赤坂遺跡（西蒲原郡巻町）など、新潟県内でも北方系の土器が出土しており、類例の増加をまって本資料を再検討する必要がある。

以上、土手上遺跡における小規模な発掘調査ではあったが、新潟県内では類例が少ない古墳時代後期土器の一括資料を得ることができ、また派生するいくつかの問題を提示することができたと思っている。

（駒見和夫）

報告書抄録

ふりがな	どてうえいせき							
書名	土手上遺跡発掘調査報告書							
編者名	寺村光晴 駒見和夫 見留武士 田中 章							
発行	寺泊町教育委員会							
所在地	〒940-2502 新潟県三島郡寺泊町大字寺泊字磯町7411-14							
発行年月日	平成11年3月29日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		町	遺跡番号					
土手上遺跡	新潟県三島郡 寺泊町大字下桐 字土手上2424-1他	59	寺泊町 No.231	37° 36' 13"	138° 48' 09"	1988.10.26 1998.11.01	135㎡	県営 ほ場整備
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
土手上遺跡	遺物包含地	古墳時代	なし	土師器約300点 その他の土器2点		遺物出土地点は土器の廃棄場 であったと考えられる。		

土手上遺跡 発掘調査報告書

平成11(1999)年3月25日 印刷

平成11(1999)年3月29日 発行

発行/寺泊町教育委員会
新潟県三島郡寺泊町

印刷/三条印刷株式会社

〒955-0072 新潟県三条市元町9番3号

TEL 0256-32-2281(代) FAX 0256-32-2670